

# ピューリタニズムの軌跡

—— John Cotton's letter to Roger Williams ——

岡 本 雅 夫

岡山理科大学教養部

(1993年9月30日 受理)

## はじめに

New England の、「古典的」な Puritan 思想の決定的な特色の一つは、教会は、神の実際のお召しを、内面的に経験したという信頼できる証拠を示すことができる男女によってのみ、構成されるべきであるという確信であった。この点に関しては、1630年、John Winthrop が、Massachusetts Bay Colony を設立しようとしていた頃には未だ統一された信条ではなかった。しかしながら1635年になって、多分 John Cotton を先導者として、Bay Colony の指導者達は、重大な統一的決定に達したのである。即ち「再生の恩恵を経験したことを語る事が、成人教会員の必要条件である」という決定であった。これはどのような点から見ても厳しい要求であった。キリスト教世界で初めて、信仰と実践における一体性を法によって強制するという積極的な考えによって、国家教会 (State Church) が、教会員の資格に、内面的な、経験的な基準を要求したのである。New England の多くの教会のそれからの問題はこの決定から生じたのである。<sup>1)</sup>

本論では、この教会員であるための資格や、教会の在り方をめぐっての、John Cotton と Roger Williams の論争を、Cotton が Williams にあてた手紙を読むことによって考察する。

## I “A Letter of John Cottons” の背景

John Cotton が Roger Williams にあてた手紙は、1643年に London で出版されている。そしてこの手紙に、“A Letter of Mr. John Cottons Teacher of the Church in Boston, in New-England, to Mr. Williams a Preacher there, Where in is showed, That those ought to be received into the Church who are Godly, though they do not see, nor expressly bewaile all the pollutions in Church-fellowship, Ministry, worship, Government.” という題目が付けられている。この手紙の内容が、キリストの教会に入ることと許されるべき人間に関することであることが判るのである。この手紙を編集した Rauben Aldridge Guild<sup>2)</sup>は、序言の中でこの手紙の背景を記しているが、その中から主要な点をいくつか取り上げてみる。

「1643年、“A Letter of Mr John Cottons”と題目の付いた4折判13頁のパンフレットがLondonに現われたが、これはCottonとRoger Williamsの間で長期にわたって交された手紙の一つであり、長く続いた論争の始めの部分と思われる。この手紙は、“Reply”の形式で書かれているが、著者はNew Englandで最も傑出した学者で聖職者の一人である。

John Cottonは、英国のDerbyで1585年12月4日に生まれている。父親のRoland CottonはPuritanであり、名誉ある家系の法律家であったが、この頃、家族の莫大な収入を不正に取り上げられていた。英国の宗教改革における二つの対立する勢力の争いが、最初の重大な危機を未だ迎えてはいなかった。“Dissenters”(国教反対者)の存在はまだ知られていなかったが、ほとんど各地に“Non-conformists”(国教非服従者)がいて、宗教改革のために祈り、努力をしていた。これらの人達は、WycliffeやLollardsの精神を受け継ぐ人達で、英国の教会をヨーロッパで最も純粋なものにしようと努力していたが、後者の派にCottonの父親は属していた。

Cottonが与えられた最初の日課は、この頃Protestantの間で非常に人気のあった“Geneva Bible”を読むことであった。そして暖炉の前で父親から聞く話は、現実的な宗教上のテーマや神学上異論のある問題であった。Grammer Schoolに進んだ後、13歳でCambridge大学のTrinity Collegeに入学を許された。Cambridge大学は、Oxford大学よりもPuritanの影響力の中心であり、Cranmer RidleyやLatimerが教育を受け、Cranmerの影響で、Strasburgの宗教改革者Martin Bucerが神学の主任教授であった。ここでは、Bacon, Milton, Newton, そしてRoger Williamsの支援者であるCokeも教育を受けていた。このTrinity CollegeでのCottonの評判が非常に高かったので大学の奨学資金が得られるところであったが、大学の財政的理由で延期されたので、設立されて日の浅いEmmanuel Collegeに移り、奨学資金を得て学寮に住むことになった。学問に励み、議論を交わし、教えるという日々を多年にわたって送り、様々な学問的栄誉を受け、到る処にいる友人達から、その当時、最も有名な青年の一人と見做されていた。大学当局によって、主任講師に選ばれ、多くの学生のtutorを勤めたが、これらの学生は後に文学界や専門職の様々な分野で優れた人物となっている。大学で自分の気質に合った仕事をする生活で、家庭で親から受けた教育の影響が現われ、Cottonの精神は完全に、根本的に変化した。Cottonは、世俗的で独善的なものの見方を捨て、主イエスの教えに謙虚に従う人間となったのである。

Cottonは、26歳(1611年)の時、13年間過した自分の故郷とも言うべき大学を離れ、LincolnshireのBostonにある、古いSt. Botolph教会の牧師(pastor)に就任した。様々な職務の他に、1週間に4回、熱心な聴衆のために説教をした。自分が担当する教区の信託者達の精神的幸せを高めようとするCottonの努力によって、町全体が宗教改革の精神に満ちたのである。Cottonが英国教会を冒瀆しているという声は鎮まり、福音の人間を導く偉大な真理が、町の人達の心に受け入れられたのである。この様にして、CottonはBostonに20年住んでいたが、広く説教師として尊敬され、人間として愛され、町の有力な

家族と知り合いになったのである。

1630年、この Cotton の教区内や周辺の有力な家族達が、John Winthrop の指揮の下で、America へ渡った。New England の首都に Boston という名が与えられたのは、Cotton が長年にわたり、説教師として成功を収めた土地に敬意を表してのことであった。

Roger Williams は、Cotton の Boston の教区近くの教会の牧師をしていて、両者が後に白熱した議論を交した事柄をこの頃から話し合っていたということは有り得ると思われるが、それは Williams の “Bloody Tenent yet More Bloody” の一節からうかがわれるのである。

1633年、Laud 大司教が英国教会を支配するようになり、St. Botolph 教会にも分裂が生じた。Cotton は、High Commission Court へ出頭するよう召喚されて、London へ逃れ、暫らく身を隠していたが、遂に妻と共に、“asylum of the persecuted and the oppressed” へ向い、8週間の航海の後に Boston に上陸した。1933年9月4日のことであった。

Cotton は、Mr. Hooker や Mr. Stone と一緒であったが、Cotton Mather は、Cotton 達が New England に姿を現わしたことをこう言っている。「この光栄ある三人組 (glorious triumvirate) は、一緒にやってきて、New England の人達に、神がこの荒野におかれた哀れな人達に必要なものを与えて下さったと言わせたのである。即ち “Cotton は衣服、Hooker は漁場、Stone は住家” である。」Palfrey は、「誕生間もない植民地の magistrates が、Cotton や共に航海してきた人達を Winthrop のテーブルに迎えた時ほど、Boston のあらゆる優れた、品位のある世代の中で、こんなにも高潔な気質と雄々しい文化の傑出した組み合わせを、Boston は見たことがない」と記している。

Cotton が Boston に到着して翌10月には、Wilson 牧師と共に、Boston にある教会の教師 (teacher) に就任し、特別な断食と祈りの日に、接手礼をもって臨んだが、これ以後、1652年にこの世を去るまで、教会との関係を保ったのである。この間の Cotton の歴史は、植民地の歴史であり、多くの教会の秩序を確立し、社会的、政治的な事柄を形成し、これらを監督する上での Cotton の影響力は非常に大きいものであったから、“Patriarch of New England” と呼ばれてきたのも当然である。Cotton が行使した偉大な道徳的な力は、かなりの程度 Cotton の優れた才能、敬虔、学識によるものと考えてよいが、これに加えて、真理の大義の為に Cotton が払った着目すべき犠牲がある。

Cotton が New England へやって来た時、彼は、尊敬に値する立派な家族同志の繋がりが、富裕な人達や、学問のある人達、優れた人達などとの交友関係、“国教を順守する” という条件ならば、英国教会の内部で早い昇進が可能である見込みなど、これら全てを後に残した、そして尊敬されながら暮らす人口の多い町の居心地の良い家と、荒野の中の粗末な開拓地とを交換し、St. Botolph の堂々としたゴシック建築の教会、そしてそこで毎週、Cotton の口から出る言葉に耳を傾ける信徒の群れと、泥の壁とカヤぶき屋根の粗末な作りの集会所とを交換したのである。こうした全てのことが、New England の人達の心を支

配する結果となったのである。そしてこの人達は、Cottonの教えに尊敬の念をもって耳を傾け、古代ヘブライ人と共に、“我々は、神が語り給うことを全て行ふなり”(All that the Lord hath spoken will we do) という心構えをしていたのである。]<sup>3)</sup>

R. A. Guildの序言は、John Cottonの出自、教育、植民地における影響力について述べた後で、CottonとWilliamsの対立する点は何であったかについて述べている。「このCottonの手紙はWilliamsが追放された直後に書かれたものである。この中でCottonは、敬虔な人間は、たとえその人達が教会の信徒集会、聖職者、礼拝、教会の管理などに関しての墮落を悟らず、恥しく思わないとしても、教会の一員として受け入れられるべきであると主張している。」<sup>4)</sup>

CottonとWilliamsの論争は、教会と教会を構成する人間は、キリストの教会の一員、そしてキリスト教徒としていかにあるべきかということであった。

John Cottonの立場は既に明らかな様に、Winthropを指導者とする神聖共同体(Holy Commonwealth)建設の宗教的支持者である。即ち国家教会(state church)の中心人物であり、例えばMrs. Ann Hutchinsonの様に、神学上の解釈に基いて、目に見える聖徒(visible saint)を否定し、神の選びは聖霊によってのみ啓示されることを主張し、キリスト以外の全ての権威を否定する人間を、秩序を乱し共同体を脅かす者として追放する側に立った。

Roger Williams(1603? -1683)は、理論的にも英国教会からの分離主義者(Separatist)であった。Massachusetts Bay Colonyへ1631年(John Cottonより2年前)にやって来た時に、Bostonの教会の牧師(minister)に招かれたが、断っている。その理由は、(1)Bostonの教会が英国教会と正式に分離していないし、明白に英国教会との過去の繋がりを悔い改めていない、(2)行政官(magistrates)が、十戒(the first table of the Law)を強制する権利はない、(3)悔い改めていない人間(unregenerate)に、神の名によって宣誓をさせる慣行に反対である、そして(4)Bay Colonyに与えられた英国王からの特許状は、原住民であるIndiansの正当な所有物である土地を不法に取り上げるものである、というものであった。Bay Colonyで不人気になって、Plymouthに移り、Salemで選ばれて牧師になっていた。しかし、Salemの教会が、New Englandの他の教会から分離することを要求し、Bay Colonyの秩序と一体性を脅かしているとして、Massachusettsの地方集会(General Court)から退去を命じられる。英国へ送還されることを逃れるために、1636年1月、先ずPlymouthへ行き、更に南へ下りProvidenceに自分の信条に基く植民地を設立し、後に、英国王の特許状を得てRhode Islandと呼ぶ植民地になっている。

再び手紙に戻ると、CottonはこのWilliamsにあてた手紙が公開されたことを極めて不快に思っていたらしく、次の様に述べている。「しかし、どんな風に、これが印刷されたのか想像できません。私が知らない内に公表されたということは確かだ、このことを耳にした時、それは私には歓迎すべからざる知らせでした。……Williamsが公表したと思う人もいるでしょうが、多分この手紙を彼から手に入れた友人だろうと思います。……Williams

に好意を持つ Mr. Sabine Staesmore という人が、私の手紙に反論する文を送って来たことがあります。この人が公表したとも思いません。誰か他の軽率なキリスト教徒が、手紙を手に入れて、神も許し給わぬ様な勝手さで、個人的助言を乱暴にも公衆の注目にさらしたのです。』<sup>6)</sup>

1647年に、Cotton が公表した手紙 (“Reply to Mr. Williams, His Examination) によって、抑制されてはいるが、「神の許し給わない勝手さ」(more liberty than God alloweth) という表現にこめられた Cotton の怒りがどれ程のものであったかが推測できるのである。

## II “Letter of John Cottons” の本文について

この手紙の構成は、「序言」にも記されている様に、Williams の Cotton に対する異議 (objection) に対して、答え (Answer) という形である。Cotton の手紙の文体は、決して歯切れの良いものではないが、年の若いかつての友人に訓戒する調子に満ちていて、Williams を追放することになった地方集会 (General Court) の決定に自分は同意していないという弁明と、Williams の追放は神の働きであるし、Williams の墮落した教えには、神の口からの剣で立ち向かうことが主に喜ばれるものであるというような前文は、R. A. Guild が言うように、「精神的に何か落ち着かず、英国で共に迫害の試練を経験した以前の友人に対する不公正で、不親切な扱いを痛切に意識している」<sup>6)</sup>と読めるのである。以下、Cotton の手紙を読み進めて、Williams が、Cotton に対してどの様な非難や異議を向けたのか。これに対して、Cotton がどの様に答えたのかを考察してみたい。

### A) 導入部

「私の唇が異邦人のそれであることを考えると (Exod 6. 12), あなたが私の声に耳を傾けてくれるとは殆んど思いません。というのは、あなたは、あなたと共にあるキリスト教会全体の人達の、そして他の教会の長老や兄弟達の証しや判断にも耳を傾けたことがないからです。それでもこうしてあなたに手紙を書く努力は、主に受け入れられるものと信じています。』<sup>7)</sup>

この冒頭の部分は、Williams の分離主義 (Separatism) は、Massachusetts Bay Colony では受け入れられないものであり、Williams がいかなる説得にも耳を貸さない頑な態度を取り続けていることがうかがわれる。John Cotton を指導者とする Puritan の集会主義 (Congregationalism) は、神聖共同体 (Holy Commonwealth) 建設の核であったが、依然として英国教会体制内にあつて、自分達の考えに従って改革を進めて行くことができると信じていた。しかし一方では、自分達の良心に従い、そして又現実的に主教が許す限り、国教非信徒 (Non-conformist) の態度を取っていた。これに対して、Williams は、上述の如くに、英国教会からの分離を名実共に求め続けていたのである。

「もし私が、主の助けによって、あなたが、この国の全ての教会に加わること

を拒み自らを追放した根拠が空しいものであることを示す努力をするならば、主は、私の努力を認め、そしてあなたにも祝福を与えないと誰に言えるでしょうか。』<sup>8)</sup>

ここに述べてあるのが、Cotton の目的である。Williams の主張することが根拠のない (sandiness of those foundations) ものであることが、Williams の異議 (Objections)、Cotton の答え (Answer) の形式で示されて行く。

#### B) Williams の二つのつまずきの原因 (stumbling blocks)

「あなたの (Williams) の手紙によって分るのですが、あなたが、我々との盟約から離れた原因である二つのつまずきの原因は、  
第一は、私達 (Cotton 達) の教会を構成する人間が教会員として適切でないこと、  
第二は、英国で、苦しみにある分離派教会を私達が軽視していること、  
であるとあなたが異議を唱えていることです。』<sup>9)</sup>

この第一の問題が、この手紙が出版された時の表題になっていたことでも判るように、この手紙が書かれた目的であり主要な部分である。これに対する Cotton の答えは、教会の構成員が、神聖共同体の構成員である Bay Colony の現実に即して、Cotton の現実との調和を図る神学的思想が展開されたものである。この第一のつまずきは、Williams の三つの異議を挙げ、それに答えを示す形式で述べられる。

#### C) 第一のつまずき (三つの異議) に対する答え

「第一に、あなたは、信仰の深い人が、教会の一員として適切な人間になる前に、Isa. 52-53, 2 Cor. 6-7, Revel. 18. 4に従って、偽りの教会の牧師、礼拝や管理を悟り、嘆き、悔い改め、そしてそれから離脱することが必須であることを、異議として唱えています。そして、こうしたこと全ては、部分的に改めるとか、今までと逆のことを実践するとかではなくて、魂、理解力、心、良心、判断力、意志そして愛情を解放することによって行われなければならない、とあなたは主張しています。

私達がキリスト教会と結ばれるのに適切な人間となるには、私達が汚れ、とらわれてきた、以前の墮落を部分的に改めるとか、逆のことを実践するのではなく、悔い改めることが必要であることを認めます。私達が更に認めることは、キリスト教会の一員であることに必要なことは、私達を反キリストへ取りこみ、キリストから私達を引き離すほどの墮落を認識することです。』<sup>10)</sup>

Cotton が云う「以前の墮落」とは、英国教会の墮落であり、それを悟り、悔い改めることは、Williams の主張通りに認めているが、更に認める「私達を反キリストへ取りこみ、私達を引き離すほどの墮落」とは、英国教会のそれではなくて、Cotton の主張する Puritan の会衆主義 (Congregationalism) から離脱しようとする分離主義 (Separatism) である

ことは、以後の Cotton の主張の展開で明らかである。続いて、Cottonは、教会員として適切である (fit matter of our Church) ための資格を、偽善者 (hypocrite) という用語を使って説明するが、この主張は、Williams が、魂、心、良心の解放、墮落からの全面的悔い改めの告白などを厳しく要求するのに対して、一般信徒に対して寛容であり、現実的であり過ぎると思われるが、このことが極めて重大であったのである。

「しかし、あなたに申し上げますが、私達が、教会での慣行を改めてきたことによって、私達が、以前の、今とは逆の歩み方をしたことについて、私達の魂をキリスト教徒らしからぬ程に卑下する努力をしてきました。しかし、このことで、いかなる全き偽善がなければ、一部の人達の隠れた偽善は、他の人達の誠実さや信仰を、そして又教会の地位を傷つけるものではありません。」<sup>11)</sup>

Kenneth Mark Harris は、“Hypocrisy and Self-Deception in Hawthorne’s Fiction”の中で次の様に述べている。<sup>12)</sup>「John S. Coolidge の “The Pauline Renaissance in England” で示されている最近の考え方では、Puritans が悔い改めていない者 (unregenerate) を教会に受け入れたのは、世の中の生活条件と嘆かわしい妥協をしたからではなくて、神の計画に従って教会を構成することに「不可欠」(essential)であったからである。Coolidge は更に、悔い改めぬ者を排除することは、非現実的であるばかりか、旧約の選ばれた人達を持つ教会の主体性 (identity) を否定することになるだろう、と言っている。というのは、この教会にはサウル (Saul) の様な、何人かの完璧とは言えない高潔さを持つ人間を含んでいたからである。更に、サウルの様な人間が、時に自分自身が神の恩恵を得ていると感じることがあったであろう様に、悔い改めぬ者も、自分が聖化 (sanctified) されていると信じるかも知れないのである。これは、我々にとって重要である。というのは、これは、Puritan が抱く私が自己欺瞞的偽善 (Self-Deceptive Hypocrisy) と呼ぶ先入主を説明するからである。そして更には、これが Puritan の教義の核心であるからである。」<sup>13)</sup>K. M. Harris の言う、自己欺瞞的偽善は、神のお召しを内面的に経験し、再生の恩恵を公衆や牧師の前で語り、それが真実と認められた者が、成人教会員の条件を満たすという決定がなされていたことから生じているのである。そして、自己欺瞞的な偽善を Puritan が容認しているのは、Calvin が Instillutes で述べていることにあると、Harris は指摘している。「神に見棄てられている者 (reprobate) も時には、神に選ばれている者 (the elect) 同様に、同じ感情に動かされることがある。それ故に、神に見棄てられている者も、彼ら自身の判断においてさえも、選ばれている人間と何ら異なることは無い。」<sup>14)</sup>Cotton が、「一部の隠れた偽善は、他の人達の誠実さや信仰を、又教会の地位を傷つけるものではない」と言うのは、Harris が指摘する、「自己欺瞞的偽善によって教会員となっている人間」を認めていることに他ならない。ここで問題になるのは、神に見棄てられている者 (reprobate) できさえも、自分が欺かれる程に、神の選びを確信させる神の恩恵とはいかなるものであるか

ということである。Coolidge の説明によれば、この問題に解決を与えたのは John Cotton であるという。<sup>15)</sup> 「Cotton の解決は、個人的な救いの為に、個々の人間に与えられる恩恵と、神によってその教会全体に集合的に与えられる恩恵を区別することである。Cotton は、‘神に見棄てられていると気づかない者によって生じる聖性は、その者には全く何の益にもならない。それどころか、その罪を増しさえするかもしれない。何故なら、Calvin が訓戒するように、神聖なものを扱うことによって、（神に見棄てられた者の）汚れた手がそれを冒瀆するからである’、という Calvin の説に同意している。それにも拘らず、善が、神に見棄てられた者を手段として得られるかもしれない、いわば、全体として信仰に篤い者のために、聖性を生じさせることによって、神に見棄てられた者が、自らを欺いて、この教会に集合的に与えられる“盟約の”恩恵 (“federal” grace) が個人的な救いの恩恵であると見做すのは、その者の心の裏切りの故であろう。いずれにせよ、その様な人間が存在するのは神の計画の一部に違いない。Cotton は、神とアブラハムとの契約 (Covenant with Abraham) から、神は、アブラハムの子孫の偽善を聖化する (God sanctifies hypocrisy in the seed of Abraham.) と躊躇することなく結論している。と Coolidge は直截に要約している。」<sup>16)</sup>

John Cotton は、神学上も Calvin に同意しながら、偽善を神の計画の一部として認める考えを抱いていたことを Coolidge は明らかにしているが、この点が Williams には受け入れ難いことであったと思われる。Harris によれば、「よく知られている様に、Cotton と Roger Williams の有名な論争では、偽善者を教会から排除 (excommunication) するというのが、お互いの主張の一つであった。Cotton は、聖徒の集会 (saints' congregations) から偽善者を締め出すことは、現実的でも、必ずしも望ましいとは信じていなかった。Cotton は、動物のたとえ話の中で「山羊の様な人 (a Goat) をそのきまぐれな性質にもかかわらず、教会に受け入れてもよいかもしれない。そしてその人は、汚れない人間になり、非常に有用な人間になるであろう。」と言っている。これに対して、Williams の主張は、難しいにせよ偽善者を締め出すことは不可欠であるということであった。」<sup>17)</sup>

Cotton の答えに戻ると、一部の偽善者も認めると言った後で、これを補うものとして、教会員として適切である人間とはどういう者であるかを述べている。

「そして、私達は、私達を反キリストへと取りこみ、教会から離脱させる程の全ての墮落を、神の恵みにより実際に悟り、認識しています。あなた自身、これらの教会の、目に見える会員は、信仰篤い人達であると認めることには同意しています。というのは、信仰篤い人達は、反キリストに取りこまれることもないし、教会から離脱することもないでしょう。そうでなければ、信仰が篤いとは言えないからです。

教会に加わることを認められた人達が、全員、以前の教会員であったことや、その教会の聖職者、礼拝、管理などによって生じた墮落を悟り、公然と嘆くこ



とが不可欠である、それがなければ、教会は成立し得ない、ということを私達は否定します。』<sup>18)</sup>

Cotton は、教会に入会を認められた者が、全員公けに、以前の墮落を嘆いて、悔い改めていることを口にしなければならぬという Williams の主張を否定する。むしろそのことが、自己欺瞞的偽善を助長すると考えていたと思われるが、これは Cotton の、人間の本性に対する深い洞察力と共感を示している点であろう。そして、キリスト教会の寛容を説いている。

「もし、教会に入会を許された者が、その者達を反キリストへと取りこみ、教会から離脱させる程の以前の墮落を悟り、嘆き、より多くの光を目にし、あらゆる偽りの道を益々嫌悪することができるように心の準備をいつでもすることができるならば、それは、反キリストから離脱することや、教会に加わることに不可欠とされること同様に、必要なことです。』<sup>19)</sup>

Cotton は、偽善を容認しながらも、悔い改めて、全ての偽りを嫌悪する心の準備ができることが、極めて大切であることを説く。

「Iudea の教会は、キリストの名において、神を信じる数千人のユダヤ人が、依然として律法を守ることに熱心で、モーゼの儀式の貧しい空虚さを理解していなかったけれども (Act 21. 20)、彼等を教会へ入会させたでしょう。使徒パウロは、ローマ人に、信仰の弱者、肉や一日一日についての盲目的な考え方の相違から自由を悟らないで、依然として律法の束縛の下にある者 (Romans 14. 1~6) を受け入れるように望んでいます。

あなたが異議を唱えるのに持ち出した聖書の箇所、Isa 52. 11, 2 Cor 6. 17, Revel 18. 4について答えますが、この内の2箇所は、あなたの目的には用をなしません。というのは、Isa と Revel の箇所は、あなたも知っているように、まだ十分とは思っていない私達がしてきた、墮落からの部分的な離脱について述べているからです。2 Corについて言えば、偶像崇拜の仲間から抜けることを要求しているだけです。……

しかし、どうしてこの偶像崇拜をしないこととか、以前の墮落から抜け出すことなどが、私達が信仰に篤い人であると認める人達、そして明白に、すでに知られている全ての罪を拒否し、嘆き、父祖達が自分達の乱婚の墮落が分らなかったように、全ての墮落の最も遠い周辺さえ分らない人達でも、もっと多くの罪を知れば、更に多くの罪を拒否するであろう様な、そんな人達を教会に受け入れることができないことを証明することと何の係りがあるのでしょうか。……この箇所から、あなたが反キリスト教的な墮落の遺物に汚されている人達は、教会の会員に適していないし、そのような人達を受け入れる教会は教会とは思えないと主張する時、あなたも判る様に、使徒達が考えていた内容が歪曲されているのです。

どうか考えて下さい。コリントの教会に、偶像崇拜の寺院で、偶像崇拜者達と

一緒であった人が居なかったでしょうか。これは汚れたものに触れることではなかったでしょうか。この罪によって、この人達を罪の告白以前に教会から排斥したでしょうか。その様な教会員を締め出さないからといって、その教会から人々を離れさせたでしょうか。」<sup>20)</sup>

英国教会の墮落から離脱しなければ、そして、更に、英国教会からの完全な分離をしなければ、New Englandの教会は、真にキリストの教会であるとは言えないという Williams 主張が、聖書の引用によって執拗に繰り返されているのが判る。

続いて二番目の異議として、「キリスト教会は、自らの罪を公けに告白するものによって構成される。がしかし、教会の一員になることを許されるのに、その告白や罪の否認は絶対的に必要ではない。実質的な真の悔い改めが認識されるならばそれで良い。」<sup>21)</sup>が挙げられる。これに対しての Cotton の答えは、偽善に対する寛容な姿勢、悔い改める心の在り方、更に Bay Colony の現実を教会が肯定していることを強調している。Cotton の答えは、Williams の異議を或る程度は認めながら、神の信仰が現実的にはどのようなものであるべきかを示唆し、とにかくすれば極端へ向う傾向の Williams を訓戒する調子に満ちている。この姿勢は一貫して手紙に読み取れるものである。

「実質的な悔い改めが認識されるならば、告白や罪の否認が絶対に必要でなくても、そのような人達を教会員として認める会衆教会 (Congregations) は真の教会であるかもしれない。……

疑いもなく、真に悔い改め、最も大きい最もよく知られている罪を告白する信仰の篤い人は、以前の歩み方の中でその人達が汚されてきた反キリスト的迷信の全ての部分を悟ってはいないとしても、我々の教会の一員とされる。ヨハネに従う者達は、収税史も兵士も一般大衆も、罪の告白をしたが、彼等が告白したのは彼らの職業にありがちな、よく知られた罪であって、……彼等の行為全てであるかどうかは表現されていない。Act 19. 18, 19

私達が受け入れる教会員の大多数が全体的に、海を越えて我々のところへ来た理由は、人間が発明した制度や儀式の束縛の重さに、彼等の魂が耐えかねて、解放されたいからである、と告白している。無知、或いは精神的な弱さから、以前の墮落に汚されていたことを心から後悔している。

その上、日々の教会での集会や、厳粛に神の前に卑下する時、私達全ての者は、自らを、神の神聖な事柄を、以前の管理や儀式の中で汚してきたことを悔い嘆いている。しかし、私達は、そのことを口にするよりは、心から悔い嘆いている。以前の墮落を悔いることを疎かにしているとして、実際にそうであるかどうか分りもしないのに、あなたが、大胆に、しかも断固として、キリストの教会を否認することがどうしてできるのか、驚きを禁じ得ません。」<sup>21)</sup>

Williams の三番目の異議は、Hag 2 . 13, 14, 15を取り上げて「反キリスト的な墮落によって汚された人間によって教会は構成されない、或いは、もしそのような教会が構成されたとすれば、その教会に加わってもならないし、それから遠ざからなければならない。」<sup>22)</sup>

ということである。これに対する Cotton の答えは、「汚れた人間」の定義をめぐって、旧約に示された律法を取り上げ、それに対する自らの解釈をかなり冗長に展開しているが、結びとして次の様に述べている。

「教会内の偽善者であれ信仰の篤い者であれ、神に関する事柄よりもこの世の事柄に関心を向けている間は、その人間自体、その働き、その神に対する丁寧な捧げものも、神の目からすれば汚れているのである。

それ故に、キリストの教会は、そのような人間によって構成することはできない。或いは、そのような教会が構成されるならば、神の民は、それから離されなければならない。」<sup>23)</sup>

Cotton は、「汚されている人間」(unclean persons) は、以前の墮落に陥って、汚されたことのある人間では決してなくて、この世の安楽 (wordly conveniences) に心を向け、そのために努力をし、教会に関する事柄を疎そかにする者であると定義する。そして「現に教会を構成する者は、偽善や、無節制な愛から離れなければならない。さもなければ、そのような人間やその義務は、その教会の地位にかかわらず、神の目からすれば、汚れているであろう」<sup>24)</sup>と結んでいる。

#### D) 第二のつまずきに対する答え

Cotton が指摘する Williams のつまずきの二番目は、教会の在り方についてであった。Williams 自身が、Boston の教会は英国教会から完全に分離していない、従って墮落しているという理由で、牧師に就任することを拒否し、更には Salem の教会で分離主義に偏向した説教をすることを禁じられて追放されることになったが、それによって Williams の Cotton に対する非難や批判がいかに激しいものであったかは理解できるのである。Cotton は、徹底した分離主義 (Separatism) を主張する Williams に、現実的な中庸の哲学を説いているのは興味深い。

Williams が Cotton に向けた非難は、Cotton やその教会が、キリストと反キリストの中間を歩いているということであり、「1) 分離主義を実践しながら、分離主義に反する説教をしたり、印刷物を作っている。2) Salem の Williams やその他の人達を分離主義として非難している。3) 特に、Cotton が、まるで教会の真理は人間の外見、外面的な自由に依存しているかのように、分離することは、神が成功させてこなかった行き方であると考え、そして説いてきたこと。」<sup>25)</sup>であった。この三つの攻撃に対して Cotton は、それぞれに次の様な答えを与えている。

「1) 神は、私達がキリストと反キリストの間で立ちどまるのではなく、二つの極端の間をどちらにも偏らない歩み方で進むように導いて下さった、と私達は考えています。それによって私達は、他の教会に残っている墮落に汚されることもなく、墮落の名残りの故に他の教会を否認もしないし、それらの教会にある神の神聖な儀式を否認しません。というのは、これらは、私達の救済にとつ

て強力であることを知っているからです。私達は今までこの中庸を実践し、説いてき、それを悔い改める原因は分りません。しかし、もしあなたが悔い改める理由を示して下されば、直ぐに悔い改めなかったことを悔いたいと思います。2) 私は、Salem を分離していると非難する人を知りません。又、Salem の人達が分離しているとは信じていません。しかし、もし、誰かが、Salem の人達を分離していると非難するなら、その分離は非難されるに値する罪だと考えます。しかし教会が、理由のない非難に際して、その教会員に寛大であることを明白にする前に、Salem の全ての教会を破門したり、その教会から信徒達を引離したりする程とがめることはないでしょう。人間の誤りとは斗うべきと考えますが、非難によってではなく、聖霊の剣によってであります。

3) 私とすれば、教会が分離するやり方は、神が成功させてこなかった方法であると、あなたが言っている言葉を口にしたことを認めますが、もし私が、教会の外見、平和や自由が、分離する教会には欠けているからである、と言っていると考えるのは大きな誤りです。……

私が言ったのは、神が教会が分離する方法を成功させてこなかったのは、神がその教会の人達の中に平和を与えず、恩恵の増大を与えなかったからです。もし、英国で、ロンドンやその他の地方に多くの分離派の教会があるとすれば、そのような人間が考え出した教会が増え、善良な心を持つ人達を迷わせるつまずきのもとになったり、改革を望む人達が、そのような人間が考え出した教会においてだけでなく、神の儀式においても自分たちの目的のためにつまずくということを目にするのは、キリストの真の使徒にとって気持ちの良いものではありません。<sup>26)</sup>

Williams を指導者とする分離派の人達が、Lathorpes が牧師をしている教会や、Plymouth の教会から離れたり、教区で神の言葉を聞くのを止めたりしている。そして、いかなる教会をも拒否し、自分達なりの儀式で神に仕えている事実を挙げて、Cotton は、次の様に手紙を締括っている。

「私は、そのような知らせが主イエスを喜ばせはしないものであると思います。それ故に、尚一層心から残念でならないのは、英国教会の高位の聖職者や人間の考え出したものとの主の戦いに力を寄せるのではなく、あなたが想像するように、ここで或いは Plymouth で、或いは Lathorpes 師の会衆教会でしたかもしれないように、主と共に戦うのではなく、主の重大な儀式に反抗する、熱心ではあるが誤りを冒している人達に力を寄せるために、その人達の所へ帰ることが、あなたを満足させていることです。誰であれ、この主の重大な儀式につまずく者は、打ち砕かれます。というのは、神の御子に口付けしようとしないう者（即ち主の口から出る言葉を聴き、信じない者）は、そのうちに滅ぶからです。Pal. 2. 12.<sup>27)</sup>」

Cotton が実践する分離主義 (Separatism) は、英国教会から離脱することではなくて、あくまで体制内にとどまって、宗教改革を推進する立場であった。しかし、Winthrop の神

聖共同体に参加し、目に見える聖徒による共同体の確立に向けた時、Bay Colony 内に散在する会衆教会(Congregations)との関係や、Colony 全体を包括する教会(national church)の設立と関連して、様々な問題が生じたであろうことは理解できるのである。多くの会衆教会(Congregations)では、例えば、Harford の Thomas Hooker, Cambridge の Thomas Shepard, Concord の Peter Bulkley などは、それぞれが、恩恵への準備 (preparation for grace) について詳細な教義を発展させていた。やがて Hooker は、共に航海をして Bay Colony にやってきた Cotton と別れ、Connecticut Valley に Colony を設立している。しかし、Hooker の教会と国家についての概念 (the New England Way) は、Bay Colony のそれと同様のものであった。従って Cotton や Hooker の概念に副わない、Colony の秩序と一体性に脅威を与える Williams の分離主義は危険視され、非難を浴び、Williams 自身が追放される破目に陥ったのである。

### III 結 び

1640年代の初期に、John Cotton は、The Way of the Churches of Christ in New England (1645年に発表) を書いていたが、その中で、the New England Way とは「分離主義 (Separatism) と Prestyleterianism (長老教会主義) の間の“中道” (middle way) であると述べている。Williams は、Cotton の言う中道の国教非信従教会 (Non-Separating Churches) の方が、恩恵の増大 (growth in grace) を生むという主張を否定したが、Williams の最も重要な主張は、「旧約聖書のいかなるそして全ての実際的価値 (relevance)、即ちその中々の様々な形式、儀式、制度は、キリストの臨在と共に排除される。それ故に、全ての人間は、個々の人間として、自由に自らの救いを求めることができる。教会或いはこの世の中のいかなる支配や規制 (government) にも妨げられるものではない」<sup>28)</sup> というものであった。Williams の New England Way に対する異議は、究極的には、この地上のいかなる権力も、個々の人間が、それぞれの方法でキリストを求めることを阻止することはできないということであった。

Williams の主張は、正に宗教的アナーキストのそれであった。神の選びが聖霊によってみ啓示されるのであれば、外面的に証明できるものでなく、験べることもできないとして、神以外の全ての権威を否定した Ann Hutchinson 以上に、Massachusetts Bay Colony にとっては危険な存在となったのである。Williams は、Cotton の手紙に返事を書いた後、直ちに彼の宗教的自由に関しての原則を堂々と肯定する論文 Bloody Tenent of Persecution を書いた。その半分は、Cotton によって書かれた試論「良心の自由」について”に対する返事であり、後の半分は、1635年に Massachusetts の聖職者が作成した—Williams は間違っ て Cotton だと思っていた—「教会と行政権力の模範」に対する批判である。これに対抗して、Cotton は、“The Bloody Tenent, Washed and Made White in the Blood of the Lamb” (1646) を書いたが、「これは Cotton の著作の中では、知力の点ではない

としても修辭的に弱く、Cotton がかつて示していた活力がほとんど見られない』<sup>29)</sup>とされている。

Cotton が Williams にあてた手紙は、Puritan が考える「再生したキリスト教徒による純化された教会」(a truly purified church of regenerate) をめぐっての論争の一端であるが、この手紙によって示される、Cotton の牧者としての寛容に満ちた姿勢は、Williams の妥協を許さない、つきつめた厳しさとは全く対照的である。Cotton は、雅歌(Canticles) についての偉大な説教の中で、「牧師は、キリストの許へやってくる人達を広く迎える扉の様であるべきだ。律法の書記やパリサイ人のようであるべきではない。』<sup>30)</sup>と述べている。

### Notes

- 1) A Religious History of the American People : Sydney E. Ahlstrom Yale univ., Press p. 146
- 2) A Library of American Puritan Writings ; The 17th Century Writings ; ed. Sacvan Bercovitch Vol. 12 The New England Way John Cotton "Letter of Cotton" pp. 287-294
- 3) *ibid.* pp. 287-294
- 4) *ibid.* pp. 287-294
- 5) *ibid.* pp. 287-294
- 6) *ibid.* pp. 287-294
- 7) *ibid.* pp. 287-294
- 8) *ibid.* pp. 287-294
- 9) *ibid.* pp. 287-294
- 10) *ibid.* pp. 287-294
- 11) *ibid.* pp. 287-294
- 12) Hypocrisy and Self-Deception in Hawthorne's Fiction : Kenneth Marc Harris ; Univ Press of Virginia pp. 4-6
- 13) *ibid.* pp. 4-6
- 14) *ibid.* pp. 4-6
- 15) *ibid.* pp. 4-6
- 16) *ibid.* pp. 4-6
- 17) *ibid.* p. 6
- 18) "Letter of Cotton" pp. 300-301
- 19) *ibid.* p. 301
- 20) *ibid.* p. 302
- 21) *ibid.* pp. 303-305
- 22) *ibid.* p. 306
- 23) *ibid.* pp. 306-307
- 24) *ibid.* pp. 306-308
- 25) *ibid.* p. 308
- 26) *ibid.* pp. 308-309
- 27) *ibid.* pp. 309-311
- 28) The Puritans in America A Narrative Anthology ; ed. Alan Keimert & Andrew Delbanco pp. 197-198
- 29) *ibid.* p. 198
- 30) *ibid.* p. 27

# On Puritanism in New England John Cotton's Letter to Roger Williams

Masao OKAMOTO

*Faculty of Liberal Arts and Sciences*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridaicho Okayama 700 Japan*

(Received September 30, 1993)

The purpose of this study is to pursue the historical developments of Puritanism in the context of the early stage of New England, particularly in Massachusetts Bay Colony.

John Cotton's Letter to Roger Williams, published in 1643, is said to be the beginning of the controversy between them over "the fit matter of the Church of Christ" and "the Separatism". The text of the letter is examined here to understand what was the heart of their arguments and what differences there were in their religious principles with reference to the civil and ecclesiastical matters against the backgrounds of New England Colony.